

## 人生を拓いてくれた「珠玉の言葉」1983年

### 1983.1.9 「知的子育てのすすめ」より

- ・ 各人の自由を尊重し、互いに他人の考え方、やり方に寛容でなければならない
- ・ これからの子供達には、ぜひ創造性を尊重する気風を身につけさせたい
- ・ 他人の創造性尊重は結局社会全体のためです。そして自分自身のためなのです
- ・ 人は自ら欲っしなれば、何事もなしとげることはできません
- ・ 社会の活力は、人がいろいろな望みを抱いてその実現に努めるところから生じます。他人によりかかって楽をしながら生きようと思ったり、安全第一で何一つ新しい試みをしようとしなない、退廃的な人間ばかり増えれば、その社会の発展はありえません。いやそれどころか衰亡への道を歩むことにさえなるでしょう。

### 1983.1.24 哲学のすすめより

- ・ 昔・・・人間以上のものを考えることによって、人間はそこに価値判断の基準を見いだしていた。

自然ないし、宇宙全体のうちに大きな生命が存在する

自然をも創造した神を考える（キリスト教）

- ・ 人間以上の絶対的なものが存在すると考えることができれば、それにわれわれは安んじてその尺度を見いだすことができるからです。
- ・ 近世・・・人間はもはや人間以上の絶対的なものを考えることをやめ、人間自身の立場から、ものを見、また考えようとするようになりました。

（人間が人間自身の立場を自覚した時代）

われわれは、経験を越えたものを認識するいかなる方法をも、もたないというべき。経験を越えたものについてわれわれがなにかを主張する時、そこには常にわれわれの主観的な思索が入り込みます。

- ・ 中世の世界観がくずれるとともに、人間は価値基準を見失ってしまいました

人間はますますただ科学的知識に信頼して、科学によって全てのことを解決できると考えるようになり、価値判断というようなものは不必要であり、あるいは少なくとも学問的な問題ではないと考えるようになりました。

- ・ 人間がみずからに自信を持ち、人間以上のものを否定するとき、そこに価値の基準というものがまったく見失われてくるようになったのです。
- ・ 科学の限界を自覚するとき、われわれは改めて、絶対的な価値の基準を見いだすことができるのではないのでしょうか。

われわれひとりひとりの人間のもつ生命というもののかけがえのなさをほんとうに実感するとき、そこにわれわれは人間の生命に絶対的な価値を見いだすことができるのではないのでしょうか。

- ・ われわれはこの人間の傲慢を脱却しなければなりません
- ・ われわれは現在、さらにいっそう人間の有限性の自覚を徹底してゆくべきであると思われます。

1983.1.26 新聞より

斉藤輝子

- ・ 旅の楽しさは、つねに新しい発見があることね。不便で苦労した所ほど楽しく印象深いわね。

渥美雅子

- ・ 最近の若い人は一に感性が欠けてること。二に決断力がないこと
- ・ 今の教育は知性優先だから、感性なんて切り捨てられる
- ・ 二人の息子は、晩熟型の男になってほしいと思っています

ボケ

- ・ 「ボケ」の「生」への唯一の執念は病的ともいえる「食」である
- ・ 近代の社会での「進歩」は、老人が生きていくのに必要な位置を次々奪って来た

個の確立

- ・ 国民は企業をコントロールできなければならない。個人レベルでは組織からの自立、解放も必要です。日本の今の経済摩擦は、製品の競争力だけの問題ではないと思います。
- ・ 個人の信念、良心と、その人が組織として示す行動との食い違い。日本では普通にまかり通っていますが、フランス人にはそう簡単に容認できない。

ブルドーン

- ・ 人類の生存よりも経済制度が優先するなどという考え方は、正気のものとは受け取れない。
- ・ 「自主管理」や「連合主義」という彼（ブルドーン）の主張はそこから生れた宗教やナショナリズムを批判し、民衆の地域的、相互的結合や、国家の連合組織のなかに未来を見るのが、彼の思想の眼目であった。
- ・ 戦後、大家族制度は崩壊し、西欧的な個人主義を求めた。日本的な共同体意識は薄れたものの、かといって「個」が確立された訳でもない。
- ・ 混乱しているのは、登校拒否児というよりは、大人やわれわれ自身の文化そのもの

ともいえるかもしれない。

1983.1.

- ・ 人間が自由をもっているということこそ、人間の悲しい性なのださえいえるのではないかと思うのです。
- ・ 人間は自分で行為を決定しなければならない。人生の苦勞はここから生じている
- ・ 人間は自由の刑に処せられている（サルトル）
- ・ 自分の行為を選ぶための原理を考えなければならない
- ・ 哲学を意識しないで生活している
- ・ 哲学は「生きる」ことに根ざしている
- ・ 現在の常識は過去の哲学者達の思索の結晶
- ・ 科学的な考え方から哲学的な考え方へ
- ・ 科学は価値判断を与えない
- ・ 科学は事実はどうであるか探求するもの
- ・ 「いかにあるか」でなく「いかにあるべきか」論を
- ・ あるべき状態が事実として成立していないときこそ、価値判断は意味を持っている
- ・ 我々はよりよく生きようと欲するがぎり、人生観の問題を考えねばならない
- ・ 科学は人生観と直接結びつかない

1983.9 日本人の生活価値観

- ・ 日本人は時代・状況に応じて、柔軟にその時期の価値観を見出し、従ってゆく国民
- ・ 抽象的・理論的ではなく、具代的・実地的な思考への傾向、包括的な体系ではなく、個別的なものの特殊性に注目する習慣、そこには超越的な原理がない
- ・ 民主主義の理念を真に理解し、共感して、ひとつの骨格をもった思想体系として自らに内在させているわけでは決してなく、彼らにとってそれはむしろ方法である。時代に適応する処世術なのである。

1983.10.24 莊子より

- ・ 彼は常に、すべての限定されたもの、一面的なものに釘づけされない自由な視野を持つ。
- ・ 彼は他人が牛とよべば牛とよぶにまかせ、馬とよべば馬とよぶにまかせ、他人の言葉にいちいち目くじらを立てない。
- ・ 他人のよびなをそのまま受けいれたとしても、己がそのよびなどおりの実体をもつものであるとは限らない。自己の本質は本質として、それらの呼び名を越えたときに厳然として存在する。言葉を越えた自己の本質に確信をもたないものだけが、そ

これらの言葉に引きずりまわされ、余計な喧騒が本来安かるべき人間の社会に妄執と惑溺の狂乱を引きおこすのである。

- ・ 真の意味で充実した自己の内容をもつもの、自己の本質に確信をもつ人間は他人のことばに引きずりまわされ、それによって自己を崩されることがない。しかし、彼は他人から逃れ、この現実の世界に背をむけて非人間的な超越世界に雲隠れするのではない。彼は常に現実の人間社会に身をおき、現実を生きながら現実を引きずりまわされず、他人とともに在りながら他人に崩されない強靱な自己の主体性をもつ。

#### 1983.10.27 文明の逆説 立花隆著より

- ・ 我々の文明を他の文明と区別する最大の特徴は、それが科学的文明にあるという点にある。科学の上に信を置き、科学こそが真理を与えうるのだという信念のもとに、科学的方法論をもとに知識の体系を積み上げ、その成果を頼りに文明を築いてきたのである。しかしいまや、科学の成立根拠はどこにあるのか、化学に何が可能で何が可能ではないのか、科学は人間に何を与え何を与えないか、科学的方法論の欠陥はどこに求められるのかといった、科学そのものへの疑問が噴出し始めているところである。
- ・ 17・8世紀の古典科学が与えた自然観、物質観、人間観は、その多くが基本的見直し、訂正の必要に迫られている。
- ・ 人間の分け方
  - 1 ことあれかし派
  - 2 ことなかれかし派
- ・ 巨大なタイム・スケールのもとで、はじめて見えてくる構図というものは、なかなか一般には認識されがたい。
- ・ 我々が現代文明の外に出られるのは、よほど未開の地か、そうでなければ、観念の上でしかない。
- ・ 現代の本質的な危機として、社会システムの危機、意志の危機、洞察力の危機
- ・ 過密社会が、人間の生物的本性を極限まで抑制していることがある

#### 1983.12.25 良寛さん 相樹社より

- ・ わしわのう、みんなの人の習い残しを習ってきただけじゃよ
- ・ 蔵王権現さまは、この吉野の山の桜を愛し、散ってゆく花びらを惜しまれて、それをお拾いになるのだ。
- ・ わしの嫌いなものに、三つある。それは、詩人の詩、書家の書、料理人の料理である。
- ・ 元来出世の意味は、自利の修行を極めた僧が、衆生済度の願いをこめて現実の大衆

社会に打って出て、利他の行に徹することです。良寛さんが他人の習い残したものを習ったというのは、この真の出世だったようです。

- ・ ほんとうのみ仏さまは、お前さまがたの、その心の中にいらっしゃるのじゃ。お釈迦さまも、三世の諸仏に仏性なく、一切の衆生にこそ仏性があるのじゃ、と教えてくださっているのう。わしはお前さまらの仏心を拝むまでじゃ、もったいないのはわしの方じゃよ。そしてまた、お経というものも、亡くなった人にあげるものではなくて、生きているお互いが聞くものじゃ。十万億土の彼方にいらっしゃる亡者に、どんな大声をあげても聞こえるものではないのじゃからのう。生きているわしらが、そのありがたいお経の教えをよく聞きわけて、お互いのほとけ心を目覚めさせなければならないのじゃ。自分の心の奥にあるみ仏さまを大切にしてくださいや。
- ・ 無一物 即無尽蔵  
「欲がなければ一切が満ち足り、欲をあらわに出せば万事が窮する。粗食であっても空腹は満たせるし、破れ衣をまとっていても、どうにか寒さがしのげるのだ」

#### 1983.12.25 自己発見法 マネジメント社より

- ・ 今の世の中、年齢、性別、仕事、思想、立場、役割・・・などの違う人達の交流がなさすぎるのではないかということでした。お互いがそれぞれの地点で自足し過ぎていて、しかし、ひとたびなにか問題が生ずると、お互いがそれぞれの単眼的視点や図式でしか相手を見ようとしなない。そういう姿勢でなされる議論は、発展的になにかを解決していく議論ではなく、お互いが消耗する議論になりがちです。
- ・ 変革の力は常に一方的に個人の側から発生する。意識の変革にめざめた人びとが集まれば、社会はその人びとへの対応の必要から変革の方向にやむなく、ゆっくり動きだ出すのである。